琉球大学学術リポジトリ

インドネシア西ジャワグヌンハリムン国立公園におけるジャワヒョウPanthera pardus melasの生態と保全

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム
	公開日: 2007-10-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ハラハップ, シャリアル　アンハル, 阪口, 法明, Harahap, Syarial A., Sakaguchi, Noriaki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2190

インドネシア西ジャワグヌンハリムン国立公園における ジャワヒョウ *Panthera pardus melas* の生態と保全

シャリアル・アンハル・ハラハップ[1] & 阪口法明[2]
([1]Biodiversity Conservation Indonesia; [2]環境省)

ジャワヒョウはジャワ島にのみ分布し，インドネシアでもっとも絶滅に瀕した哺乳類の一つである．また最高位捕食者として熱帯林生態系において重要な役割を果たしている．西ジャワに位置するグヌンハリムン国立公園(面積 400 km^2)の 60%を占める自然林はヒョウに最適なハビタットを提供している．

2001 年から 2004 年にかけて，チカニキ周辺地域(面積 20 km^2)において，生態学的データ収集のためカメラトラップとラジオトラッキングによるヒョウのモニタリング研究を実施し，合計7個体(成獣オス 3 頭，成獣メス 2 頭，幼獣 2 頭)を識別した．調査地の定住個体数から求めた生息密度は 6.67 km^2／1頭(0.15 leopard / km^2)で，グヌンハリムン国立公園の生息個体数は 41.7～58.2 頭と推定された．ラジオトラッキング調査の結果では十分データが得られた雌の行動圏の広さは 9.82 km^2であった．カメラトラップのタイムレコードから，日周活動パターンは早朝 6 時～9 時，夕方 15時～18時の時間帯に活動のピークがあることがわかった．糞分析の結果，非常に幅広い食性を示し，リーフモンキー，イノシシ，マメジカ，センザンコウ，ホエジカなどを食べていた．

グヌンハリムン国立公園及びその周辺地域の希少種 3 種(ヒョウ，テナガザル，ジャワクマタカ)の個体群とその生息地の安定を確保するため，希少種保護行動計画を策定した．これら 3 種の保全はその希少性だけでなく，アンブレラ種もしくはキーストーン種としてグヌンハリムン国立公園の生物多様性保全上重要である．行動計画策定のため，研究活動及び住民との情報交換により保全のために必要な基礎情報を収集した．生息地の減少と分断化，住民生活との軋轢，密猟がヒョウの生存を脅かす主な要因と考えられた．上位目標である個体群と生息地安定の確保を達成するため，基礎情報収集，個体群と生息地の監視活動，生息地の分断化阻止等を下位目標として設定した．

2004 年，インドネシア政府は近隣のグヌンサラックなどの周辺地域を含め，グヌンハリムン国立公園を 3 倍に拡大した．グヌンハリムン地域とグヌンサラック地域を結ぶ回廊の確保は生息地の分断化解消のために不可欠である．ヒョウ個体群と生息地の監視活動が住民参加により開始された．しかし，ヒョウが家畜を襲うことによる住民との軋轢は未だ解決されておらず，この問題解決は保全への住民の意識向上と密猟防止のために重要である．